Japanese Journal of Applied Psychology
1989, No. 14., 81-95

討　論

「校則」を考える

大　村　政　男（日本大学）
Masao OHMURA (Nihon University)
駒　崎　　勉（城西大学）
Tsutomu KOMAZAKI (Josai University)
加　藤　宣　彦（前東村山市立第１中学校）
Nobuhiko KATO (Former Higashimurayama lower secondary school)
三ツ木照夫（日本大学櫻丘高等学校）
Teruo MITSUKI (Nihon University, Sakuragaoka high school)
渡　辺　紀　夫（聖教新聞社）
Norio WATANABE (Seikyo Shimbun)

昭和63年10月29日，本学会の公開シンポジウムが駒沢大学１号館で行なわれた。発言者は上記の通りである。発言者から話題提供後，参加者を交えて活発に討議が行なわれた。本報告は，そのときのテープ記録に司会の大村が手を入れて整理したものである。

中村(学会事務局)：ただいまから日本応用心理学会シンポジウム「校則」を開催いたします。日本応用心理学会では毎年一回公開のシンポジウムを開くことにしております。このシンポジウムはできるだけ up-to-date な問題を取り上げております。一昨年は「いじめ」について，昨年は「文化摩擦」を取り上げました。今回は「校則」です。「校則」はまさに現代的な問題で，いじめや校内暴力といった校内問題と密接に関係があると思います。私はこの「校則」の問題について詳しくはありませんが，校則を無くしてしまったほうがよいという考え方の人もいらっしゃるでしょうし，絶対必要という立場の人もおられると思います。そのようなことについて，われわれはいろいろ知っておかなければなりません。そういった理由で今回このようなシンポジウムを企画したわけでございます。それでは，まず最初に私から今回司会をしていただく大村先生をご紹介させていただきます。

私が存じ上げているかぎりでは，先生は人格研究，特に不安の研究者です。しかし，最近ではいろいろな問題を取り上げておられます。血液型と気質・性格の問題，あるいは教育心理学の立場から学内のさまざまな問題について研究なさっておられます。それでは先生よろしくお願いします。

大村(司会)：それでは私のほうから今回のシンポジストの先生をご紹介申し上げます。最初は渡辺紀夫さんです。渡辺さんは昭和19年のお生まれで，東大農学部で木材工学を勉強された方です。それがなんと新聞記者になられ，現在，聖教新聞社の社会部記者としてご活躍です。詳しく申し上げますと，特報部の部長さんです。記者としての仕事のほかに，劇画や映画のシナリオ作家として，また教育カウンセラーとして活躍されておられます。

次の方は日本大学付属櫻丘高校の国語の教諭をしておられる三ツ木照夫さんです。昭和12年のお生まれで，私の教え子の一人です。三ツ木さんは国語の教科書の編集にも当たられ，『晩年の志賀直哉』という著書もあります。校則については非常に厳しい方で，下高井戸の日大通りで「三ツ木」というと生徒がみな逃げ出すというすさまじさです。私もなん回か目撃したことがあります。なにはともあれ私の教え子の中では逸材です。

次の方は加藤宣彦さんです。加藤さんは昭和２年のお

生まれで，慶応義塾大学を卒業されたのち，ずっと教育畑におられまして，東村山市立東村山第一中学校の校長で定年を迎えるまで，多くの中学校の教頭や校長を歴任されておられました。現在は，東村山の教育委員会で登校拒否の生徒や，帰国子女の指導に当たっておられます。これまで NHK の「おはようジャーナル」，「教師の時間」，それから「お母さんの勉強室」などで校則問題を取り上げていらっしゃいます。著書としては『教師の体罰と子どもの人権』や『私にとって教育とは何か』などがあります。加藤さんのお考えは，生徒の自主性を重んじて学校のきまりを生徒とともに作り上げていくといったもので，たいへんユニークな教育評論家でいらっしゃいます。

一番最後の方は城西大学の心理学の教授で駒崎勉という方です。ご専門は人格と適応に関することです。賞と罰に関するハーロックの実験は有名ですが，駒崎さんはそこに性格の因子を含め，外向性の子どもはどうなるか，内向性の子どもはどうなるかについてたいへん興味のある実験をなさいました。著書としては『パーソナリティの心理学』などがあります。

これでいちおう４人のシンポジストのご紹介が終わりました。「シンポジウム」というのは「ともに食べる」という意味があります。ここでは「校則」というテーマをフロアのみなさんとともに食べようと思います。ご意見の異なる方も多いと存じますが，４時半ごろまでともに食べてまいりましょう。最初にお一人大体15分ぐらいずつご意見を述べていただきたいと思っています。普通ならば，４人の方の発表が終わりますと，またもとにもどって５分ずつぐらいの補足発言をするのですが，ここではそれをしないで，すぐディスカッションに入りたいと考えています。なにとぞよろしくお願い申し上げます。

最初は，心理学者の立場から駒崎さんにお願いします。

駒崎：最近なにかと校則に対する風当たりが強くなってきて，「くたばれ校則」とかいうことばを耳にするようになりました。校則結構という人は少なく，校則はどうもよくないという意見が強くなってきました。私の立場は，集団生活をする上には「きまり」は必要であり，生活上の危険を防止する上にも当然きまりはなくてはならないというものです。

いま，校則が問題になるのは，校則それ自体が悪いというよりも，むしろ校則それ自体がどうあるべきかということを考える。または校則を見直すこと，こういうところが欠けていたのではないかという反省の上に立って，いろいろな批判が出てきたのではないかと思うのです。それから心理学的な観点からものをいうわけですが，私はそれを３つにしぼってみました。一番目は「校則」とか「きまり」は児童や生徒の心身の発達に合った問題でなければならないということです。二番目は広い意味での弱者にとって「校則」や「きまり」が脅威になってはいけないということです。広い意味での弱者というのは，いろいろなハンディを持っている子ども，いじめのターゲットになっている子ども，家庭的に恵まれていない子ども，内向的な子ども，陽の当たらないところにいる子どもなどを含んでいます。三番目は「校則」，「きまり」，「生徒心得」というようなものは時代の変化や環境の変化に応じて絶えず見直しをすべきだと思うのです。バランスをとる，チェックすることが必要だということです。伝統的な校則だからいじるとタタリがあるといったようなものではいけません。「いじってもいい約束事」というフレキシブルなところが必要です。そうでないと「タテマエ」ばかりが優先してしまって，守らなくてもいいような規則が乱立してしまいます。そういう規則が子ども時代に並んでいるということは，その子どもが成人したときに「適当にやろうや」という気持を起こさせるのです。「タテマエ」だから守らなくてもかまわないのです。そのような大人社会がやってきたらたいへんでしょう。中学や高校時代から守らなくてもいい死文化した規則に取り囲まれている，ということは本当に危険なことです。

私は「校則」とか「きまり」といったものは一種の社会文化だと思うのです。例えば，同一地域，東京都なら東京都，埼玉県なら埼玉県といったような同一地域で，あまりにも違った社会文化が存在すると，子どもたちは違和感を感じてしまいます。それではいけないのです。また，子どもたちが小学校から中学校へ，中学校から高校へと進むたびにカルチャー・ショックのような校則ショックを起こしたらこれまたたいへんなことです。このようなことから考えれば，「校則」は普遍性を持ったものでなければならないのです。その普遍性の中で，ある学校は多少厳しいとか，ある学校には少しおもしろい校則があるとか，そういうものが出てきてもいいと思っています。それが校風といえるのではないでしょうか。特色にしても，校風にしても，それは精神的健康のセンスであり，かつそのセンスの中で多少のばらつきがある，それが学校のおもしろい動き方ではないかと思うのです。条件反射的な教育ではいけません。これが，きょう，私が申したいことの全体像なのです。

中学生ぐらいの年齢に焦点を合わせてみますと，かれ

らは心理検査を受けるまでもなく社会的承認の欲求が非常に強い年齢です。いわば目立ちたがりやさんが増えています。それとともに自尊心のたかまりということも起こってきます。この２つの傾向は発達とともに現われてくるもので，これがないとおかしいくらいなのです。自尊心が高まって，自己を前面に出してきたということは，かれらが自立しようとしている一歩前だということにもなります。中学生はそういう構造上の一大転換期になるのです。このような時期にあまりにも厳しい校則はよろしくないことは当然のことなのです。例えば，先生方が子どもたちに“お前，少し自分というものを考えろ，中学生ではないか”といって叱っているのですが，もう一方では“そこはきまりになっているのだから守れ”というのです。主体性を尊重していながら，きまりのところへくるとそのきまり通りにやらせる。子どもたちも矛盾を感じると思います。この時代の子どもの心理をよく考えて手を打つべきだと思います。

私の近所の中学の話ですが，生徒心得の第なん条かに「家の手伝いをしなさい」と書いてあります。ところが，別なところでは「アルバイトはしてはいけない」といっています。さらにおかしいのは，自家営業の場合はお客さんに顔を見せないで奥のほうで仕事を手伝え—と書いてあるのです。このような矛盾はほうぼうにあります。読んだ子どもはまごついてしまいます。子どもたち自身，納得のいくようなものがほしいのです。

さきほど「三ツ木」というと生徒が逃げるという話がありましたが，どんなこわい顔をした先生かと思いましたら，ソフトな方なのでびっくりしました。子どもたちはそういう先生がいるから悪いことをしない，おとなしくしている，というのでは困ります。いても，いなくてもきちんと規則を守ることが必要なのだと思います。今度のシンポジウムのことで私も中学生や高校生に会っていろいろ聞いてみました。にわか勉強なのです。厳しい校則も見せてもらいました。私が君たちたいへんだねといったら，かれらは割合のんきなのです。どうして？と聞いたら，別にたいしたことないよというのです。私は不思議に思いました。どうして？と重ねて聞いてみました。かれらは“だって要領の悪い奴がひっかかるんだよ。こんなことが書いてあったって，うまくやれば大丈夫”というのです。私は要領のよい生徒を養成するみたいで，これではいけないと思いました。

ところで，校則や生徒心得というようなものには「なぜ」の部分が欠けているように思います。きまっているのだから—ですべてをすませてしまうのです。どうしてそうしなければならないかの説明が欠けているように思われます。存在理由というようなものがはっきりしていないのです。近所の中学の校則に，1.すすんで家の手伝いをしよう，2.テレビやラジオはよい番組を選ぼう，3.読書をしよう，4.夜間の外出はしない，5，6，7は抜かして，8.家族の一員として明るく楽しい家庭を作ろう—というのがありました。これは子どもにいっても始まらない話です。「ぼくは一生懸命楽しい家庭を作ろうとしているのに，おやじは飲んだくれで困ります」というような感じがする校則だと思います。

もう少し，子どもに矛盾を感じさせない，子どもが納得できるものがほしいです。「夜，外出するな」という校則もあります。塾に通っている子は夜塾に通うのです。本当におかしいと思います。

大村：それでは教育評論家の立場から加藤さん，お願いします。

加藤：現場の校長を終わったばかりなので教育評論家というのはどうかと思います。そこで私は現場からのお話をしたいと思います。きょうは「校則」がテーマになっていますが，「校則」と呼んでいる学校はないのです。「生徒心得」とか，「私達の約束」とか，「生活のきまり」などと呼ばれているほうが多いのではないかと思います。歴史的に見て，日本のきまりにしても，校則にしても，生徒心得にしても，道徳と法律，規則と心がけといいますか，そういったものが同居し，混在しているのです。それが誤解の原因の一つになっていると思うのです。家のお手伝いをする，家族の団欒に協力する，そういったことと，遅刻や無断外出などをするなということとはまったく次元が違うことなのです。それがごちゃまぜになっているのです。

私自身の実践からお話をさせていただきますが，私がある学校で校則をなくしたのは昭和55年ごろでしょうか。校則をなくしたといっても残したものもあるのです。例えば，遅刻をしないこと，無断外出しないこと，自転車通学はしないこと‥などほんの５項目ぐらい残して，あとは全部無くしてしまったのです。それは決して校則そのものが悪かったのではなく，当時1,500人，33クラスの学校の中で，校則がなかなか守られないのです。そこで，子どもたちをもう一度校則でがんじがらめにしてみるか，それとも子どもたち自身に考えさせてみるか，を考えてみたのです。そのとき，ある先生が“これはとてもがんじがらめに縛ることはできない。むしろ，子どもたち自身の力を借りてこの学校の規律を回復したい”という発言をされました。それが校則のほとんどを無くしてしまった理由です。生徒は私に“校長会に行ったら，よその学校の生徒手帳をもらってきてね”

とか，“田舎にいるいとこから田舎の学校の 生徒手帳をもらったよ” などといって生徒手帳をくれました。100冊近い生徒手帳が集りました。それをいろいろな角度から分析しました。それはたいへんな作業でしたが，中央委員会が中心になって見事に分析しました。その中での最大公約数といいますか，そういうのを原案にしたわけです。ところが東京の学校の生徒心得というのはたいしたことないのです。660の 公立中学校がありますが，どこを見てもそれほど厳しいものはありません。厳しいといえば，校則ではなくて，その背後にある「先生の心」なのです。その姿勢いかんですべてが変わってしまうのです。ところが地方から集められてきた校則は，マスコミからたたかれて も 仕方がないというの が 結構あります。 例をあげてみましょう。 高知県のある 中学校ですが，「繁華街に外出するときには制服を着用すること」というのがありました。このような規則は田舎に行くと結構あるのです。「学外に 外出するときは制服とする」というものもあります。 これでは 矛盾が 出てくるのです。 新宿の 歌舞伎町あたりに 住んでいる 子どもはどうなるのだ，ということになります。このような子どものために「ただし，その繁華街に居住する生徒はその限りではない」 と書いてあります。 やはり， 矛盾があります。この繁華街に居住している生徒が六本木に行く場合はどうなるのか，ということになります。しかし，このような場合を考えてちゃんと付則がつけられています。それは「ただし，その生徒も他の繁華街に外出するときは制服とする」というのです。

法律でも施行例があってどんどん細かくなってしまうのです。 静岡県のある中学校のことですが，「盆踊りのときは町内できめた服装でもよい」， つまり浴衣がけでもいいということなのです。しかし，「ただし， 見物するときは制服とする」ということが付けられています。生徒が質問してきました。私は “お色直しというのがあるだろ” と冗談をいいましたが，やはりおかしいです。

生徒に校則を作らせてみました。かれらが作った原案は非常に多様でした。私が無くした校則は35項目，その学校には40項目しかなかったので，校則は５項目になったのです。ここに現場の先生がおられたら申し上げたいのですが，校則の見直しをするときに，ただ子どもにまかせておくと，むしろ保守的で細かい規則になってしまいます。管理されている子どもはそういう発想しかできないのです。もちろん，職員会議は子どもたちの出した原案を否決といいますか，差し戻しをしました。こんなに，私たち教師につごうのいいきまりが守られるはずはない，と思ったからです。今度は私たちが乗り出しました。「全クラスに校則について考えさせる」，「世の中には果たしてきまりというのは必要か」，「なぜきまりがあるのか」，「私たちの学校にも規則というものが必要なのだろうか」，「必要だとすると，いま君たちが毎日明るい学校生活を送るために困っていることはなにか」，「問題点はなんなのか」，「この学校の規則になにを取り入れたらいいか」ということについての草の根の討議を約半年間やりました。 その結果，「私たちのクラスが作るこの学校の規則」というものを，各クラス１通ずつ提出させました。これはたいへんなことのように思いますが，同じ屋根の下で生活しているので，ほとんどといっていいほど似たものがあがってきました。それを中央委員会が整理して新しい校則の原案を作り，全校生徒の投票にかけたのです。その中で過半数を獲得したものを校則にしたのです。できあがったものは17項目でした。現在でもその学校は17項目です。これらの項目のうち，職員会議で問題になったものが２項目ありました。１は「学用品以外の物は持ってこないこと」ということです。これに対して，「ただし，トランプや将棋は雨の日ならばよい」というのが過半数を取ってしまいました。私たちは「雨の日ならばよいというきまりが全国にあるかな」と思いましたが，生徒指導の先生が “いや大丈夫ですよ。生徒たちは朝テレビを見て，雨の確率50%というとき，どっちにするか迷うようなことはありません。持ってくる子は晴れた日でも持ってきますし，持ってこない子は雨の日でも持ってきません。そんなものですよ” と発言しました。その通りでした。２は「いやらしいことをしないこと」というのが過半数を取ってしまったのです。生徒会長を職員室に呼んで “校則というものは具体性がないとおかしいよ。こんな抽象的なきまりはだめだよ” といってやりました。生徒会長は “いやらしいことの中味がわからないのは先生方だけなのです。僕たちにとってはきわめて具体的だから過半数を取ったのです” というのです。“例えばどうなんだ” というと “それが言えないことだからこうなったんだ” というわけです。そこで，これもそのまま通過させました。 １年たったら，「人のいやがることはしない」というように直りました。さすがに恥ずかしくなったのでしょう。ニュアンスが違います。私のねらいは，校則作りを通して子どもたちの自治の力を高めようとしたのです。このねらいは達成されたと思っています。

さきほど申し上げましたが，道徳と法律，規則と心がけというものが， わが 国においては 混在しているのです。このあたりを見直すべきだと思います。

要約しますと，子どもたちの生命を守るきまりと，子

どもたちの秩序を守るきまり，それから子どもたちを育てるきまり，子どもたちの成長のための心掛け的なきまりといったようなものなどを整理していくことが必要でしょう。安全保護規定，秩序規定，転校のときなどの手続き規定，保健室や図書館の利用規定，このような規定はある程度学校のほうで押しつけてもいいと思います。子どもたちに示してもコンセンサスが得られます。

最後に残るのは規範規定です。この規定については，ある程度子どもたちに呼びかけ，親たちの意見を聞いたほうがいい―というのが私の提言です。それから，日本の学校の校則でなにが欠けているかというと，まず第1に規則が子どもたちの人格を犯していないかということです。第2は説得力のある合理性があるか，人権を犯してはいないか，第3は時代と環境に適合しているかどうかということです。第4は規則を改正する手続きを明記すべきではないかということです。私は生徒たちと全国から100冊以上の生徒手帳を集めましたが，改正の手続きを付した生徒手帳は1冊もありませんでした。生徒会規則の改正手続きはすべての手帳に出ているのですが，校則改正の手続きはどこにも出ていませんでした。アメリカで1カ月間，中学校に滞在しましたが，ほとんどの学校の校則に「この規則，またはその運用が適切でないと思った生徒は，先生方の注意を喚起するために勇気をもって申し出なさい」ということが載っていました。アメリカもずいぶん荒れていましたが，でも，さすが民主主義のお家元だなと思いました。

最後に申し上げたいことは，いま，校則の見直しが全国的に行なわれていますが，見直すのは校則そのものよりも，むしろその背後にある教師の心が大切なのです。

大村：それでは現場教師の立場から三ツ木さんお願いします。

三ツ木：私を見ると生徒が逃げるというお話ですが，校則について現場教師が一番問題にするのは，破った場合のペナルティなのです。これがないと生徒はこわがらないと思います。私は高校教師を27，8年やっていますが，校則はやはり運用が第1だろうと思います。校則を作るよりも運用がむずかしいのだと思います。私もまだまだ経験不足で，きょうは勉強させていただくつもりで参加したのです。朝日新聞にもきょうで4回目になりますか「校則」のことが連載されています。私の学校で，かつて卒業生あたりが「御三家」というのを作ったことがあります。「鬼の‥」，「殺しの‥」，「いやみの‥」がそれです。私は「いやみの三ツ木」といわれました。どうして私がそう呼ばれたかというとペナルティを課すからです。そのペナルティも他の先生とは違うのです。私は晩年の志賀直哉先生のところに10年ぐらいフリーパスで出入りしていました。その敬慕していたことも手伝って，『暗夜行路』という小説を2回，自分の手で筆写したことがあります。また，井上靖さんの新聞小説もやったことがあります。毎朝学校にまいりまして35分ぐらいかけて，新聞小説の1回分を筆写しました。そういう体験があるので，ペナルティというと，たたいたり，座らせたりすることではなく国語の教科書のある部分を原稿用紙に一字一句ていねいに筆写させ，漢字には振り仮名をさせるのです。それがペナルティで，いつまでにそれをやるかが指示されるのです。もしやってこないと親に電話をかけます。きちんとやってきた生徒はほめます。字が下手でもほめてやります。叱ったあとのフォローがないと恨みだけが残ってしまうからです。このようなことは「校則」の運用からすれば非常に簡単なことです。私は教師と生徒との間の本当の信頼感こそが校則の運用に大切なことだと思います。

大村：ありがとうございました。それでは新聞記者の立場から渡辺さん，お願いします。

渡辺：私は取材をしていた中で感じたことをお話したいと思います。まだ記憶に新しいことですが，岐阜県の高校の修学旅行でヘアードライヤーを持ってきたことが原因で先生が体罰を加え，その生徒を殺してしまったという痛ましい事件がありました。このような体罰問題，校則問題はどうも西のほうに多いようです。ところで，小学生の場合は家庭のきまりがそのまま学校に持ち込まれてくることが非常に多いのです。そのいざこざが中学や高校まで後を引いているような気がします。学校の先生にも未成熟な人がいて，校則の運用の仕方に問題が出てきているような気がします。具体的な例をあげますと，女子中学生の白いソックスがあります。そのソックスを三つ折りにしなければいけないという校則が愛知県内のある学校にあります。その中学ではそうしているにもかかわらず，隣りの中学では絶対に折ってはいけないとなっているのです。三つ折中学で伸ばしている子は突っ張り女生徒になります。その子が隣りの学校の生徒に同類だと思って声をかけたところ，むこうは知らないから挨拶を返えさなかった。そのためリンチ事件になったことがあります。伸ばした子は三つ折中学では突っ張りですが，隣りの中学では伸ばした子は普通の子なのです。折った子が違反者になるのです。どこか目立ったことをしないとやっていけなくなっている子どもがいるのです。そういう子どもの趣味的背景を忘れて，一律的に校則を運営していこうとするところに問題が生じている

ように思います。教室で挙手をするということがあります。 ある学校では， 挙手は左手ときめられています。右手には鉛筆を持っているからです。そして挙げ方もちゃんと45度ときまっているのです。しかも，もっと細かいのです。２本指の挙手は，友だちの答えにもう少し付け加えたいとき，３本指の挙手は友だちの答えに賛成することを意味し，４本指の挙手は質問があります，友だちの答えに反対ですということを意味します。このような細かいことをやっているところもあります。加藤さんのお話のように規則というものは作り始めたらキリがないのです。そういう制度を当然だとしている地域は，東京のような非常にゆるやかな地域を異常だと思います。自分の地域はそれ相応にやっていくのだから放っておいてくれという声もあります。ある学校では給食がないので弁当を持って登校しなければなりません。そうすると友だち同志でオカズの分け合いが始まります。家庭からは弁当についてのきまりを作ってくれという申し入れがあり，そのような校則ができました。そうすると，先生も親も寄ってたかってそれを守ることばかり考えてしまうのです。一つの集団をまとめるために原則論として校則が生まれてきた。ところがこのタテマエとしての校則が一人歩きをして人間を締めつけてしまうのです。

さきほどの挙手のことですが，45度でぴったり揃っていていいというので，それが教育研究会でたいへん話題になったそうです。それを自分の学校に移植した先生が，同じやり方ではというのでちょっと変えたのです。２本指，３本指，４本指，握りこぶし（じゃんけんのグー）というわけです。まさに点数稼ぎで，うちの学校にはこのように細かい規律があって，よく運営されていますよということにすぎないのです。有名なのは愛知県の三河地方のある中学ですが，下足箱に靴を入れるときの規則があるのです。下足箱の端から１cm というところに，ぴちっと並ばなければいけないことになっています。これが守られていないと教師の指導が悪いということになります。そこで，あれや，これやと子どもたちを縛りつけるのです。子どもたちは反対できない，そこでその不満が他の面に出てくるのです。 例の 「モグラ叩き」と同じです。交通規則も，規則と抜け道のイタチごっこです。教師と子どもとの信頼関係をまず作っておかないと，子どもは同じ規則でも自分たちに対する圧迫としてしか感じません。私は本業のほかにカウンセリングをしていますが，同じ規則でも運用する先生の関わり方によって違ってくると，生徒たちはいっています。関わり方いかんで，喜びも悲しみもあるのです。例のヘアードライヤー事件の先生ですが，あの先生はとても優しい先生だったのですが，生徒の反応に対してムカムカしてやっているうちに自分がわからなくなり，気がついてみたら生徒は死んでいたというわけです。髪の毛がいつも突っ張ってしまってどうしようもないから―という部分はまったく無視されてしまうのです。子どもたちを「人間」として扱わないところにネックがあると思います。原因論，つまり「これだから‥」という理由をあげる場合が非常に多いのですが，大人社会は結果論なのです。「してはいけないことをした」という事実関係だけで判断してしまいます。最近の子どもは未成熟で抑制が効かないので，原因論と結果論のすれ違いがひどくなっています。私は今から８年ほど前，大阪のほうにいましたが，ずいぶん荒れた学校がありました。中学の先生で腕を日本刀で切られた人もいました。

校則をぐっと厳しくして徹底的な管理をするとき，それとはまったく異なる方法で生徒にはたらきかける先生が出てきます。その先生は校則は校則として，自分と子どもたちとの信頼関係の樹立から始めていったのです。生徒たちは「あの先生のいうことだから聞こう」，「だからやろう」という気を起こしてくるのです。校則を起点とするのではなく，人間関係における信頼を基本としていくのです。 規則である， 規則だからではダメなのです。これが私が取材して得た現場的感覚です。

埼玉のほうに生徒指導の神様といわれるくらい有名な校長先生がおられました。取材のためにお逢いしました。どんないかめしい人かと思ってお尋ねしましたら，すばらしく優しいお顔の方でびっくりしました。腕力でなくて押さえているのです。その先生は「肩たたき（元気かね）」から始めているのです。 校長として赴任してきたとき，「悪（わる）」といわれる生徒たちが先生のことをジロジロ変な目で見ていたそうです。そこで先生はニコニコ笑いながら“君たち，なかなかいい目をしているね”といってやったのだそうです。悪どもはそれで調子が狂ってしまったわけです。校長先生は毎朝校門で肩たたきをしました。“きょうも元気そうだね”，“一緒に勉強しようね”などといって肩たたきをしたのです。そのうちに生徒たちの服装違反もなくなってきたそうです。「あの先生はオレのことを信用している」ということからくる信頼感です。きまりを守らせるためには，どこからそこに入っていくかということが大切なのです。教育する側のほうもいまひとつ見直しをやることが大切であるということを，きょうここで提案したいのです。

大村：どうもありがとうございました。ただいま４人のシンポジストに発言していただきました。従来の方式ですと，ここでお１人５分ずつぐらい追加発言をするわ

けですが，きょうはこのままフロアとのディスカッションに入っていきたいと思います。ご発言の方は所属氏名をおっしゃって，だれに回答してほしいとか，４人の方に意見を述べてほしいとかおっしゃってください。

板倉：私としてちょっと問題にしたいのは，校則に違反する子どものなん人かは創造性を求めての違反があるのではないかと思うのです。校則が正しくないからこうしなくてはいけない，というような姿勢があるのではないかと思うのです。そういう点はどうでしょう。

大村：ちょっと補足します。ただ今ご発言になった方は本会の名誉会員の板倉善高さんです。内田クレペリン精神検査という有名な検査がありますが，板倉さんは図形を用いた精神作業の検査を作成されています。私どもはそれに「イタペリン」というあだ名を付けています。板倉さんどのシンポジストにお聞きになりたいですか。

板倉：違反者中には独創的な子どももいるのです。その子どもの意見を聞いてほしいのです。４人のシンポジストの方，どなたでも結構です。

三ツ木：もっともなご意見です。旧制高校生は文学づくと同人雑誌のようなものを作りました。いまの生徒は漫画ブームの中で育ったので似顔絵なんか実にうまいですね。非常にうまいアニメの同人雑誌を作っている生徒がいましたので“ちょっとバックナンバーを出してくれ”といって出させ，きちんと封印しました。そして“なかなかいいものだが高校でしよっちゅう回し読みしていたのでは困る。しかし，一流の漫画家を目指して努力してくれ。学校には持ち込まないで，社会的にどんどん活動してほしい”といってやりました。ペナルティは課さないで，独創性のある子を伸ばしてやったのです。

加藤：生徒の立場になると，どこかで自分を目立たせようとして校則違反をする子，学校の管理体制に批判的な立場から校則違反をする子，それから自分のアイデンティティを主張したいというか，クリエイティヴな子というか，いろいろです。例えば，ズボンの横幅が23cmから26cmまでとか，ウエストがどうあるべしとかきめている学校があります。目立ちたがり屋の子どもはどうするかというと，校則違反ではないが特殊なズボンを買ってくるのです。標準型のズボンなのですが真中が太いのです。つまり提燈型のズボンです。校則ではズボンの真中のサイズはきめていませんから，そういうのを見つけてくるのです。こういうことはクリエイティヴなものに入るかもしれません。これでは取締まるほうは困ってしまいます。私の体験では，“文化祭にロックをやらせてくれ”といってきたので許可したのですが，新しいコスチュームを買うと家庭の負担がたいへんだし，デタラメなものを着てこられても困るので，制服でということにきめました。当日，かれらは制服でやりましたが，ボタンが全部背中にありました。「なるほど‥」と思いました。今年の４月でしたか，江戸川区のある中学校の女子生徒がたった１人私服で登校したという事件がありました。あれは校則というよりも学校の管理体制に対する批判的立場でやったのです。私たちが非常に困るのは，私服がいくらクリエイティヴであっても校則違反なら容認することはできないということです。あの学校では，教頭を含めて３人ぐらいの先生がその女の子と押し問答をして，学校に入れるの，入れないのとやってしまいました。私はちょうどNHKの「おはようジャーナル」に出演していました。いきなりそのビデオを見せられて，“先生だったらどうしますか”と聞かれ，生番組なので非常に困りました。私は“そうですね，私だったら昼休みにでも校長室に呼んで，コーヒーでも入れてやって『どうして君は私服で来たのかな』と子どもと一緒に考える場を作りますね。それでは，みんなと一緒に考えてみようか，ということにしますね”と答えました。校則そのものよりもその運用とか，教師の心が大切なのです。

大村：お２人のシンポジストから答えていただいたので，板倉さんからの質問に対する回答はここで終わりたいと思います。

板倉：私服なるものが果たして合理的なものかどうかという場合があります。制服の欠点を生徒が教えてくれるという場合もありましょう。九州と北海道では制服もえらく違います。子どもの意見や反則がかえってクスリになるということがあります。

富崎：駒崎先生に質問します。先生は条件反射による教育ということをおっしゃいましたが，詳しく教えてください。

駒崎：一般に厳しい校則で縛るという場合，校則はこわいから，あるいはあの先生は怖いから，ということで自分の行動を規則していくと，子どもたちは自分は芯から悪いのだ，これは悪いから止めとこう，というのではなく，まさに条件反射で，あの先生の顔を見たらおっかないので，やばいから止めとこう，それが重なっているうちに，その先生の顔を見ればピッとしてしまう。そこには，なんら子どもの自主性と意図が入っていないのです。それはそれでよいのですが，条件反射によるような躾が場面が変わっても果たしてそれが，すなわち反射的行動が出てくるかというと，そうはいかないのです。先生の顔を見たからではいけないのです。１年中先生がい

るわけではありません。教育の効果は場所が変わっていても，条件が変わっても，どこでも同じ効果が出てこなければいけないのです。場面次第で条件反射が変わってくるというようでは本当の教育ではないような気がするのです。つまり普遍性を持った，いつでも広がりを持って，どこでも同じような行動ができることが必要です。学校で物を壊わしたら叱られるからしない。家に帰ってからならかまわない，というのでは困ります。

ペナルティを課した場合，その場では非常に「すまなかった」という顔をして反省の色も濃いのですが，それで本当に子どもが納得したのでしょうか。他の場面でもちゃんと効果が出てくるか，心配なのです。先生に叱られたことは，自分が悪かったのだということが自覚されなければなりません。この点，三ツ木先生いかがでしょうか。

富崎：のちほどでよいのですが，駒崎先生に小学生や中学生たちが，精神発達面においてどのような段階にいるか，図式的に教えていただきたいと思います。

三ツ木：学校にこわい先生がいると，生徒の中には，こわい先生をこわがることに興味を持つ子がいます。恋を恋するのと同じです。櫻丘高校には男子生徒も女子生徒もいるのですが，私と電車の中で目と目が合うと「キャー」なんていう女の子がいるのです。なにも知らない乗客は「けしからん先生だ」と思うでしょう。そう見られてはたいへん具合が悪いのです。学校という所は，本当はそういうこわい先生がいすぎても困るし，いなくても困るのです。そのバランスが必要です。先生たちの中には私がいるのをいいことにして，“あの先生にまかせておきゃいいんだ”といって，見て見ぬふりをする人がいます。これが一番困るのです。それから生徒のほうに迎合しちゃって“そうだ，そうだ，お前，原稿用紙に文章なんか写したって，反省しなければなんにもならないのだ”というようなことをいうのです。これでは私の苦心も逆効果になってしまいます。これでは陰日向のある生徒をいっぱい作ってしまうことになります。多くの先生が，校則は守るべきだ，という大原則だけは曲げずに手を取りあっていくべきです。先生が先生を批判していたのでは学校はバラバラになってしまいます。私はそういう点で，先生方の横の連絡さえできていれば，駒崎さんがご心配される方向にはいかないのではないかと思います。

駒崎：三ツ木さんのお話はたいへん面白く興味津津です。

小学校から中学生にかわるあたりの子どもの心の発達ということでしょうか，愛情の欲求の発達ということも大いに関係してくると思うのです。小学生の場合，先生たちは「お父さん，お母さんを大事にしましょう」なんていいます。これは CM にもありますが，しかし，小学生は本当にそうするでしょうか。私はそのようなことを小学生は意識していないと思うのです。小学生時代に，お父さん，お母さんを大切にしょうとか，背負って立とうなどと思う子がいたら，それはノイローゼです。小学生時代は，お父さん，お母さんから愛情を得たいという時期です。その時期に愛情を十分に受けた子どもも，やがて中学に入り，思春期を迎え，自我の成長に一大変革を起こしてきます。アイデンティティの確立とか，自我の確立とかいう重大な時期がやってくるのです。その時期を無事に過ごすためには，小学生時代，あるいはもっと小さなときに彼，あるいは彼女を愛してくれる，可愛がってくれる人が必要なのです。しかし，中学生時代は，「‥からの愛情」から「‥への愛情」へ移行する時期なのです。ここに第２反抗期というものが現われてきます。小学生時代と違って，お父さん，お母さんへの愛情が芽生えてくるのです。ところが愛情の現わし方はまだ非常に下手なのです。母親が「今，スーパーで安いサラダオイルを売っているから，10缶ほど買ってきて」といったとき，子どもはたいてい仏頂面をします。しぶしぶ買いに出かけたとしても，家の中まで持ってきません。玄関先に置いたまま知らん顔をしています。そのとき母親が“そんなにお手伝いがいやなの”といわないで，“手伝ってくれてありがとう。でも，もう少しだね。家の奥まで持ってきてほしいの。お母さんがぎっくり腰になってしまうと困るからね”といえばいいのではないでしょうか。中学生の下手な愛情表現をうまく誘導してやる必要があります。

愛情の欲求のほかに自己顕示の欲求も考えなければなりません。中学，高校になるにつれて自己顕示の欲求も非常に強くなってきます。この欲求も校則に関係してきます。自分で自分を表現しようという気持の現われだからです。校則を運用する側も十分それを踏えていなければなりません。社会全体もです。だからといって甘やかしていいというわけではありません。

校則は守らなければならない。それはよくわかるのですが，守れるような無理のない校則が必要なのです。中学生は知能の発達段階から考えて，不合理の発見や矛盾の発見が可能になる時期です。そこで理屈に合わない校則だとどうしても納得できないのです。理屈が立つような，理屈が説明できるような配慮が必要ではないかと思うのです。そうなると，校則の内容自体よりも運用のほうが大事ということになります。これは先程もお話があ

りましたが，運用が大事なのです。しかし，守れないような校則を作っておいて運用面でなんとか，という考え方もおかしいのです。最初からなるべく守れるような校則を作り，しかも子どもたちによく理解できる。それが基本ということになりましょう。

大村：どうもありがとうございました。それでは加藤さんどうぞ。

加藤：先程，三ツ木さんが自分１人だけビシビシやっているのでは困る，他の先生も協力してくれないと困る，ということをおっしゃいましたが，私も実感します。三ツ木さんの悩みはそこにあるのです。あれは三ツ木がやっていればいいんだ，ではいけないのは当然です。三ツ木さんだけ浮いてしまったのではどうしようもありません。

大村：他にどなたかご質問は‥‥。

溝田：教師と生徒が適正な距離を持たなければということがよくいわれていますが，私がそのような立場に立ったとしたら適正な距離をうまく保てるでしょうか。具体的に教えていただきたいのです。

渡辺：最近，いろいろな若い人と話をして思うことは，ストロークスの出し方が下手な人が多いようです。「ストロークス」というのは「なでる」ということなのですが，「ことばでなでる」，つまり「ほめる」ということで，ほめるのが下手なのです。ほめられるのは好きなのですが‥。人をほめるのが下手ということは，人とうまくやれない人なのです。

きよう，私とあなたの場合は3.6メートル以上は離れていますから政治家の距離なのです。肉親の関係になると45センチ，本当に親しい友だちになると1,2メートルぐらいだそうです。例えば，喫茶店で前向きで話をしているときは親しい友だちで，横に並んでいる人はもっと親密，というのが私の見方なのです。先生と生徒の関係は，普通，公的には教壇から生徒を見ているわけですから，社会的距離で見ているわけです。ところがある先生はそれを上手に崩して，生徒のすぐ横に行って「おい，元気か？」と声をかけるのです。先生は自分のことを好いてくれている，それがストンと心の中に入ってくるわけです。

このようなことを自然にやっている人と，逆にいつもそればかりやっている人と，突然おれは教師だ，というようにやる人がいるのです。もちろん，自然のうちにそういうことができるのがいいのですが，大事なことは生徒のほうに「見る自分」と「見られる自分」という分化があることが望ましいのです。自意識が出てくる10歳以後がいいのです。他人との距離間隔の保ち方を教えるのはどうしても家庭なのです。それが先生と生徒との距離間隔に影響してくるのです。お父さんや，お母さんが人との接し方を教えなければいけないのです。ところが，最近は自閉的な傾向が非常に強くなって，自分の家庭だけよければ，自分さえよければ，が強くなってしまっています。人と仲よくしよう，きまりを守ろうという意識がすごく薄くなっています。10歳ごろまでに家庭でしっかり教えておかなかった，つまり躾しておかなかったので，大学生になっても他人の自転車を平気で失敬してしまうような人間が出来上がってしまうのです。校則を守ることは大切ですが，校則以前の部分が仕上がっていないのです。人と仲よくやっていけること，それから距離間隔を近づけていくことは，どんな人でも必要なことです。そのためには，相手の好むことをしゃべってあげることが大切なのです。いうことを聞かない子どもに，いうことを聞かせるためにはまず仲良しにならなければいけない。その子が一番自信を持っていることを見つけて，それについて語り，それについてほめ，距離間隔を縮めていくのです。これが私の認識です。巨人軍が好きな子だったら「きのうも勝ったね」といえば接近できるのです。しかし，なんにもいわない人がいるのです。１週間いても，10日いても，そういう人とは近づきようがありません。人と人との関係でなくて，人と物との関係になってしまうのです。人間関係を近づけるためには，どうしてもことばをかけ合わなければなりません。優しいひとなで—がほしいのです。それはあるときは肩たたきであったりすることもあります。これが行なえれば，どんな先生でも子どもとの距離間隔を近づけていけるのではないかと思うのです。さきほど加藤さんの話を伺って，なるほどと思いました。子どもと真剣に話し合いながら，納得させて行動させる。これが本当の対話ではないでしょうか。最近は，この対話があるようで真の対話がなされていないのです。ことばのキャッチボールではなくて，スパイラル状に深まっていくことが必要なのです。

三ツ木：さきほどからほめるということがしきりに出ています。この間，「おかあさんの勉強室」という番組で，原田という画家が話されたのを見たのですが，小さいときに先生にほめられたこと，励まされたことが非常に力になったといっていました。私は大学１年のとき大村先生の授業を受けましたが，こんなすばらしい先生がいるのかと，なにか勝手にほれ込みました。その授業はちゃんとした本があるのにガリ版で，その日のテーマをきちんと整理して配ってくださる，手づくりの講義なのです。私は１回も休まないで出席しました。試験の１週

間ぐらい前に先生から“君は今度の試験受けなくてもいいですよ”といわれました。“単位はもらえないのですか”というと，“そうではありません。その分，ほかの勉強をしてください”とおっしゃるのです。大村先生と同じようなことをおっしゃった先生がもう１人おられました。三省堂の字引きにお名前が載っている柴田武という方言学の大家です。この先生も“あなたはたいへん授業を活性化してくれました。授業を受けただけでいいです。他の勉強をしてください”とおっしゃってくださいました。これは私の生涯で，試験を受けないで優（A）をいただいた貴重な２つの体験です。きょう馳せ参じたのもそのようなところにあったのではないかと思っています。先生と生徒との関係は，考えればむずかしいことなのですが，明るいということ，これはとても大事なことだと思います。どんな苦しいことがあっても，授業は明るくするということが大切です。生徒のほうが近づきにくかったら，教師のほうから生徒に触れて，生徒から学ぶのです。私は志賀直哉先生について学ぶのに先生の『暗夜行路』を２回も筆写しました。『大津順吉』も写し取りました。筆者とのぶつかりあいなのです。よい教師になるためには，本ばかり読まないで生徒にぶつかって，生徒の心と自分の心とをぶつけ合わせることが必要なのです。そうすると「金八先生」みたいになるかもしれません。生徒は年年歳歳違ってくる生身の人間ですからワンパターンでは把握できません。しかし，教師は自分から積極的にチャレンジしていけば，必ずや道は開けてくると思うのです。

溝田：僕は千葉県に住んでいます。校則の厳しさにかけては東の横綱といわれている県です。中学生たちと接することも多少ありますが，かれらが校則を守っているのは学校の中だけなのです。このような校則なら止めてしまって基礎を作っていくほうがよいのではないかと思うのです。学校を離れればなにをしてもかまわないというのではいけないのです。

加藤：私は校則をみんななくしてしまいました。みんなというより殆んどです。残った校則というのは，これを守らないと君たちは死んじゃうよといったようなものです。例えば，ボルテージの高い変電所があるから近よらないこと，校庭が狭いのでバットを振りまわさないこと，などです。大学とは違いますから学校へ来たら無断外出しないこと，自転車を置く場所が狭いから，自転車通学をしないことなども校則の中に残っています。こういうところは一歩もゆずれないところです。子どもたちも反発しません。ストンと胸に落ち込むようなきまりなのです。胸に落ち込むようなきまりとはなにかというと，説得力を必要としないきまりです。静岡県出身の方には恐縮ですが，西の愛知，東の千葉といわれますが，真中の静岡もたいしたものです。私は愛知県の出身ですが…。静岡のある学校に行ったら朝からジャージに着替えるのです。ま，それもいいでしょうが，前と後に姓を書いた15センチ角ぐらいのゼッケンをくっつけるのです。私はお客で行ったので外交辞令で“すぐ名前がわかっていいですね”といいましたら，教頭さんがニコッとして“あれなら遠い所で悪さをしてもすぐわかりますよ”とおっしゃるのです。私はこのような発想が，校則が批判される最大の原因だと思うのです。私は35項目の規則をなくしたのですが，なくす前の職員会議では相当の反論がありました。校則がなくなったら学校が支離滅裂になるのではないか，生徒はルールのある社会に出て行くのだから学校にだってルールは必要，順法精神を教えることこそ教育ではないか，などという当然の反論がありました。私があえて発言したのは「35項目をなくしたら本当に目茶苦茶になるかな」ということなのです。それから「先生方，この学校の規則をなん項目覚えていますか」ということです，胃が痛くなるといいますが，胃が痛くなって初めて胃の存在に気づくのです。フロアにいらっしゃる聴衆の皆さんも，自分の中学生時代の校則をどのくらい覚えているか考えてください。覚えているとすれば，相当神経質に管理されていたか，あるいはなんらかの都合があって覚えているのではないかと思います。

私は子どもたちの自律的なものにまかせても秩序はかなり維持できると思います。そこで一つ問題になるのは家庭のことです。私はあるとき，多摩地域1,800人の生徒と父母および教師に校則20項目を並べ，この校則は必要ですか，必要ないですか，それともある程度の規準をきめて，その範囲の中で指導するかどうか，という３段階に分けて調査したところ，統一してほしいという統一志向を現わしたのは父母なのです。例えば，ゲームセンターへの出入を禁止する，ということを校則にすることについて「する」といったのは先生や生徒の３分の１以下でした。ところが親たちは半分以上が禁止を校則にしてくださいというのです。そうすると，教師は親たちの期待に応えるべく間違ったところで頑張ってしまうのです。本当なら子どもたちと楽しい話し合いをする時間に，ゲームセンターに行ってうちの生徒がいるかいないか，レストランにうちの生徒が入っているのではないか，そういうチェックに走りまわってしまうのです。親も教師も一緒になって管理体制を布いてしまうのです。

私はそういうことで自信があれば，学校には最低の安

全保護規定とか，秩序規定，手続規定，利用規定，これくらいあれば済むのではないかと思います。

渡辺：私の子ども２人が通っている中学には校則がないのです。いま加藤さんがおっしゃったようにやってはいけないこと，例えば遅刻とか授業時間のこと，こういうことはきちっときまりがあって，それを守らなかったら学校は成り立たないこと，そういうことはきちっときめておかなければいけないと思います。それ以外のことはなにもいらないのです。

ところでいま一番困っているのは靴のことです。毎年のように新しいデザインの靴が売り出されます。そうすると子どもはどうしてもそれを欲しがります。そういうのを履いて行くと徹底的に先生からなぐられるのです。私は高校時代にあまり靴を履いていきませんでした。下駄で登校したのでいつも睨まれていました。どうして下駄で登校したかといいますと親が買ってくれなかったのです。今はそういう時代と違います。ものすごい多量の製品があって，その中で一番不細工なものの１つが学校で使われるので，心外だという子どもが多いのです。

加藤さんが指摘されたように一番大事な部分はなにかということを把握しなければいけないのです。どの部分をきちんとおさえるかが問題です。それをしないで「校則」という全体で把えてしまうと論議の焦点がぼやけてしまいます。授業中，子どもが勝手に教室に出入したりしたら授業はできません。こういうことについてはきちんとしたきまりを作っておかなければなりません。人間集団のための最低限のことは絶対に必要なのです。

溝口：最低限のきまりを学習させるようにする環境を作らなければいけないのではありませんか。

渡辺：子ども・家庭・先生という三位一体が成り立たないとだめなのです。規則だけが飛びはねてはなんにもなりません。三位一体にならないと効果があがりません。みんなが共通の意識に立って作りあげて作っていくのがこれからの校則である，というのが私の考え方なのです。

大村：ほかになにかご質問はありませんか。

小柳：私は児童専修学科にいる関係上，特に私立の小学校の校則について興味を持っています。私立の小学校の中には伝統を重んじて，それを校風として掲げ，それを売物にして入学希望者を受け入れるタイプの学校があります。私自身が私立の小学校出身なので，いつも校則には不満を持っていました。この間，その小学校にいってみたところ，あい変わらず校則はそのままで，なにかおかしい気持になりました。先生方は各自その校則について誇りを持っていて，一流と思っていらっしゃるのですが，校則をなん年たっても改めないのはどうかと思います。伝統のよいところを残していくことはもちろん大事なのですが‥。

校則は時代によって改めなければならないものだと思います。ここに小学校のきまりの本があるのですが，内容の１例として持ち物についてきまりがあります。その中には，学習に関係のない本や品物は学校に持ってきてはいけないとか，持ち物は小学生にふさわしい物にしましょうとか，派手なものはやめましょうとか，ハンカチは白‥などと細かいきまりが書かれています。

大村：私立の小学校は厳しい校則を売物にしているところが多いし，服装なども厳格です。自分の体より大きそうなランドセルを背負って電車に乗ってくる子どもをよく見かけます。それが名門校であるということが，わが国には定着しているようですが，私立小学校についてシンポジストの方がたのご意見を伺いたいと思います。

加藤：私は公立校しか経験ないのですが，日本だけではないのです。日本にも外国にもきちんとした制服や厳しい校則のあることを誇りとしている学校はかなりあります。公立校の場合，親が子どもが通う学校を選べないのです。いま丸刈りがよく問題にされますが，本校は丸刈りですという場合に子どもが選べないのです。しかし，体に関係するようないわば人権すれすれの問題については親が抗議したことがあります。熊本の場合は裁判所にまで持ち込まれました。

ところが私立の場合は契約説というのがあって，嫌だったらすぐにでもやめればいい，校則の緩やかなところへ転校すれば，ということになります。熊本の丸刈りのことですが，裁判所の判決は学校側に軍配をあげました。丸刈りに合理性はないが，合法性はある，校長の裁量の範囲内だとしたのです。したがって制服その他についても，公立校であっても校長の裁量の範囲内である程度生徒を拘束することができる，ということになると思うのです。私立の場合はなおさらです。私立校の持つ歴史的な伝統なり，なんなりがあるから，人権に関することさえなければ学校のほうが強く出ても，生徒がおかしいと思っても，そのままいってしまうのではないかと思います。ここにも私立校の先生がいらっしゃいますので，あとでご意見を伺いたいと思います。よく間違えるのは，熊本の裁判の例を引いて，学校側に軍配があがったのだから丸刈りは正しいのだという人がいますが，実際はそうではないのです。原告側のほうは丸刈りはおかしいと主張したのに，学校側はスポーツに適当だなどといって裁判の席で弁明しているのです。スポーツに適当というのなら全校生徒にやらせる必要はないのです。

三ツ木：答えになるかどうか自信がありませんが，私の高校は女子はセーラー服なんです。私は男なのでよくわからないのですが，生徒に聞いてみると，あんなに暑いものはないそうです。特に夏場は‥。着てみてくださいよといわれたこともあります。ところが親の立場からすると，私はセーラー服の女学校を卒業してきたのだから娘にもセーラー服を着せたい，お父さんもセーラー服はいかにも女学生らしくていいといっている，ということになります。入学式のとき，親がカメラを持って来るのが多いこと，わが娘のセーラー服姿に恍惚としているのです。私も自分の息子を自分と同じコースに入れました。いま経済学部に通っていますが，写真こそ撮りませんが，親が自分の入った学校に子どもを入れる，自分が着た制服を子どもに着せたいと思うこころは同じです。親というものは私をも含めて石頭の人が多いのです。父母は積極的に制服には反対しませんし，先生も年配になればなるほど頑固です。それに入学するとき，学校のいうことを全部守りますという誓約書に捺印して提出しますから，なかなか改革などというところまではいきません。

渡辺：さきほど私立の小学校のことが話題になりましたが，私の近所の私立高校でも厳しさを売物にしています。しかし，度を超してしまいました。「生徒心得」を見ますと，髪の毛は額の真中辺を超えて長くしてはいけない，などというわけです。眉毛が見えなければいけないのです。髪の毛がその基準より短かければなおさら結構というわけです。人間の美的感覚をゼロにしてしまうようなヘアスタイル，それで果たしてよい教育ができるでしょうか。似合わないのにわざわざそういうスタイルをさせる，そこにサディスティックなものを感じさせます。

よく教師の心が問われている時代といわれますが，私は，現在教師はすごく厳しい状況に置かれているのではないかと思うのです。多くの問題をかかえて，子どもたちと真剣に取り組んでいかなければならない時代なのです。家庭のほうで厄介なことを学校に持って来なかったら，教師は無駄な時間を使わないですみます。すぐ監督不行届ということで学校に文句をいってくる，これでは教師はたいへんです。それから学校自体にどこからか見えざる管理が行き届いていて‥，その中で教師が閉塞的な生活を強いられる，そういうことから子どもたちをスケープゴートにしてしまう，非常に心配するところです。

いま，教師のいじめが話題になっています。この間の朝日新聞にも載っていました。とてもセンセーショナルなデータでした。福岡教育大の人の調査でしたが，この間，日本教育社会学会で発表されたものなのです。先生方415人を調査したところ，教師間のいじめが多いというのです。どんないじめかというと，まず「仲間外れ」があげられます。それから「ことばによるおどし」があります。それらを経験した人が20%ずつぐらいいるのです。「仲間外れ」というのが21%。お茶などつがないで，その人のところをパスしてしまうのです。どんな先生がやるかというと，年上の先生（28%）や女の先生（26%）です。そういうことが子どもの教育に影響しているかということですが，調査では子どもの教育に影響しているというのです。子どもに当たってしまう先生がいるのです。八ツ当たりなのです。それをしてしまう先生が35%ぐらいいるというデータなのです。校則や校風，それから子どもの教育のことなどで先生の間に葛藤が起こってきてはたいへんです。

大村：ある大学の付属幼稚園を出て，付属小学校，中学校，高校，大学と付属街道を進み，大学院の前期・後期課程を出て，その大学の教授をしている人がいるそうです。全部同じ広大なキャンパスの中にあります。唖然としました。しかし，こういうルートは親としては楽です。しかも制服はきれいで，ファッション性があるし，名門といわれれば親の鼻も高いのです。ただ，こういうルートをたどると，自分を振り返えるとか，まわりを見回す，そういうことがないのではないかと心配します。

中山：どこかで教師が非常に圧迫されている。そうするとどこかでエネルギーを発散しなければならない。そうすると子どもに当たるようになる。しかし，当たるにはそれ相応の根拠が必要になります。その根拠に「校則」が使われてしまいます。「生徒心得」も根拠になります。

「校則」というのは文化のパターンの1つなのです。そこで常識の範囲内であってほしいと思います。しかし，日本人は常識ということばを非常に嫌うのです。「あいつは常識でしゃべっている」，「きょうの講師は程度が低く常識なみだ」などといって嫌います。「校則」とか「きまり」というのはこの常識の上に成り立っている，いなければならないと思うのです。日本の学校の校則も，私は法律家でないのでよくわかりませんが，最終的には心理学でもなければなんでもない。常識（カマンセンス）が大事だと思うのです。それでは常識はなにを頼りにするのかというと，哲学の先生を呼ばなければならないのですが，常識は常識できめてもらわなければなりません。常識とあまり掛け離れた校則では納得できません。

イートン校では喫煙と飲酒は1回目は罰金だそうです。日本円で3,200円ぐらいですが，2回目は倍になります。3回目は無条件で退学だそうです。それから制服のことですが，最初は制服を着るのがとても恥ずかしかったそうです。そのうちだんだん慣れてきましたが‥。白の手袋，シルクハット，今はもうなくなってしまいましたが，やはり時代の流れで見直されたのでしょう。ただイートンみたいな伝統のある名門校ですと，あれを着るということはたいへん誇りなのです。いい学校の生徒はその学校の制服や制帽をむしろ進んで着用するのではないでしょうか。それだけのレッテルを付けて歩くわけですから‥。

私ぐらいの年配のものはみなそうですが，子どものころ大体制服で大学まで通いましたので，自分がどういう格好のものを着れば似合うのか，全然選べないのです。センスというものが育たない世代なのです。そういう意味から，小さいときからその子に合ったものを選ばせるのがいいと思います。制服というものを与えてしまうのはどうかと思います。

加藤：私の知り合いのお嬢さんなのですが，私立の幼稚園から大学まで一貫教育で進み，銀行へ勤めましたが，幼稚園から銀行までずっと制服なのです。そのお嬢さんが遊びに来られて私の家内と話をしていましたが，そのお話の中に“私は幼稚園から大学を出るまでずっと制服だったので，銀行に制服があったのでホッとしました”ということがありました。着替えて外出すると不安でしようがないのだそうです。これでいいのかな，この服装でいいのかなという不安なのです。

思い切って制服をなくすという発想も面白いと思います。さらにいいたいのは，一般の場合，なぜ中学の段階で制服にするのかということです。小学校から制服という学校は少ないのです。中学で制服をきめているところは，東京では武蔵野や杉並を含めてわずか17校です。なぜ自我が形成される時期に制服にするのか疑問です。

三ツ木：私は中学から大学院まで同じ大学なのですが，いつもなにを着ていけばいいのかわからず，やぼたいものばかり着ていたことを覚えています。冠婚葬祭のときは制服は便利ですが‥。これは制服の利点です。

渡辺：私は制服があってなきがごとしという学校で育ってきました。男の子はともかく，女の子はお母さんが仕込むのです。それが家庭教育の基本になっているわけです。色の感覚は大体6歳ぐらいで確定するといわれていますが，その前に自分の好きな色を徹底的に選ばせるのです。そうすると子どもなりに好きな色をきめて適当にやっていくのです。中学ぐらいになるとさまざまなものを自分で買いにいくようになります。現代っ子はとても感覚がいい，あきれるくらいいいのですが，どういうものを選ばせるか，そういうところになるとやっぱり家庭教育の分野になります。

駒崎：制服がフォーカスになっていますが，女子の場合スカートが下からなんセンチというきまりがあります。このシンポジウムの準備のために“あなたの学校でスカートをずるずる引っぱっている子いない？”ということを聞いてまわりました。ある家ではハンガーに掛かっているのを見せてくれました。それは東京都内のある私立高校の制服で，たいへんしゃれたものでした。スカートがチェックで，色は地味なのですが実にいいんです。それをずるずる長くしたら，まったく似合わないのです。時代の変化に合わせて，生徒たちのニーズを取り上げていく，そういうことが必要だと思います。

アメリカのハイスクールの男子生徒が，日本の高校にはたいてい制服がある。うらやましい，自分たちにはないのだ，といっているのを聞いたことがあります。そこで，君たちのハイスクールには，きまりやルールがないのかと尋ねてみました。答えは「ルールはある」ということでした。どんなルールがあるのかと再び尋ねてみました。驚いたことに2つあるのです。1つは「ピストルを持ち込まないこと」，それから「麻薬を持ち込まないこと」の2つしかないのです。実にエッセンシャルズというか，最低限のコモンセンスというか，それにビシッと押えられていると思うのです。話は横道にそれてしまいましたが，制服が良いか，悪いかということよりも，もう少しセンスのあるものがほしいです。時代に合ったものに変えていく必要があります。

大村：むかしから男の子は詰め襟，女の子はセーラー服です。これではかっての日本の陸軍と海軍です。いま駒崎さんも触れられたように，だんだん変えていくほうがいいでしょう。このごろは外国のデザイナーが作った制服が採用されてきました。制服にもハイレベルなファッション化がより強くなると思います。

きょうここに4人のシンポジストの方が並んでおられますが，実はあとお二人並ばれる予定になっておりました。お一人はNHKの名物番組「中学生日記」のディレクターをやっておられた立元幸治さん，それから学習院大学教授の永田良昭さんです。立元さんはNHKの佐賀放送局の局長として栄転されてしまい，ご出席が不可能になりましたが，永田さんは本日フロアーのほうにおられます。永田さんは，今度鳴門教育大学で開催される日本教育心理学会第30回総会で「校則」についての研究発表をなさいます。永田さんにはぜひシンポジストに‥

とお願いしましたが固辞されました。きようはフロアーのほうにいらっしゃっておられますので，ご意見をいただきとうございます。

永田：材料不足なので，意見というよりはお教えいただきたいという気持です。さきほど加藤さんが校則のほとんどすべてをなくされたこと，駒崎さんが最低限のコモンセンスが必要だということ，たいへんよいことだと思います。加藤さんの学校で生命の安全などに関係したこと以外の校則を全部廃止されたことを伺って敬服しました。ごくわずかな校則の項目を残したわけですが，それをまとめる過程は非常にたいへんなことだと思います。先生方の間にも，生徒同志の間にも，先生と生徒の間にも，さかんな議論が行なわれたことと思います。例え5，6項目にせよ，深い背景を持っていると思うのです。もしそれがなければ，三ツ木さんがこぼされたように他の先生が知らん顔という状態になってしまいます。先生が多数おられる場合，普通の状況では意志の疎通がうまくいかないのです。しかもある基準を作っても先生によって扱い方が違ってしまってはしめしがつきません。

そこで伺いたいのは，なるべく生徒の個性に合わせて，かれらの納得のいくものを作るという発想と，他方では生徒を一定の望ましい方向に持っていきたいという発想があります。この兼ね合いをどう考えていらっしゃるか，ということなのです。

加藤：私が校則をなくした学校では，例えば，トランプや将棋を持って来たとき，校則の12番目を見なさい，というように校則に寄りかかっていました。しかし，校則がなくなったのでそういう指導ができなくなりました。ところが，学級で規則を作ろうという傾向が現われてきたのです。ある先生は“おれはこのクラスの担任だ。おれの目の黒いうちはダメだぞ”で通してしまいます。その先生はおそらく三ツ木さんのような人柄の人だと思います。心があたたかく，やかましいけれど子どもたちの心を握っている人なのです。子どもは先生の指示をいい意味であきらめて受け取ります。あの先生がいうんだから…ということなのです。信頼感があるからそういうことが成り立つのです。その話を聞いたある先生が同じことをやったのですが，まったく相手にされませんでした。

そうなってきますと，学校のクラスがクラスごとに動きますから整合性というものがなくなってきます。となりのクラスはトランプがいいのに，自分たちのクラスはだめなのですから‥。生徒のなかにはとなりのクラスへ出張してトランプをするものが出てきました。混乱が現われてきたのです。先生方は，校内研修会はいままで形式的だったが，こういう状況になったらしっかり話し合わなければ‥という気持を持つようになりました。そして開校以来初めての宿泊研修会が狭山湖のほとりの国民宿舎で行なわれました。そして，最低これだけはみんなで守っていこうという規則を作りました。規則を破った生徒に対する対応はそれぞれの先生にまかせました。タバコをすっている生徒がいたとしましょう。その生徒に対する対応の仕方は先生それぞれで違ってくると思います。それでもいいのです。継ぎはぎだらけの学校経営でしたが，職員室の中はいつも笑い声が満ちていましたし，校舎の中も校庭も活気に満ちていました。外部から見るとちょっとだらしがないようでしたが，子どもの心の中は明るかったのではないかと思います。

三ツ木：私の学校の私のクラスのお話をしたいと思います。私のクラスではクラス費というものを100円取っています。私が自分で大きなヤカンを2つ買ってきて，お昼休みに生徒たちが麦茶を飲めるようにしたのです。ところが事務室のほうから反対が出ました。一人だけそういうことをやっては困るというのです。それではやめようということになりました。麦茶をやめて学校にある焙じ茶にしました。食べ盛りの子どもたちがインスタント食品を好むので毎日熱いお湯を用意してやりました。それからソースや醤油なども用意させました。PTAでは“親なら親らしい弁当を作れ”といいます。昼休みに教室へいって“いいお弁当だね”とか“こんないいお弁当を作ってもらったら勉強しなくてはね”などと語りかけています。

生徒たちは，こちらが思っているということがわかれば，かなり厳しいものであっても理解するものです。

私は遅刻癖のある生徒3人に始業の15分前に登校させて生活日誌というものを提出させています。これで20回も30回も遅刻していた生徒がピタッと止まってしまいました。

小林：最近の親は自分の子どもばかりをいい子，いい子して，躾するということはやっていないように思うのです。躾は学校まかせのような気がします。

三ツ木：2，3日前に新聞を読んでいましたら塾の広告に「本校は躾と学力を」というのを見て唖然としました。世の中にはだめな親というのがいます。そういう親は“先生，うちの子は言ってもきかないのです”というのです。言ってきかないときはもっといわなければいけないのです。ずいぶんひどいことをいう教師だと批判する親もいます。“注意してもきかないのです”といったらもうおしまいです。親らしいことをしてほしいのです。

学校というところは，一人がおかしな行動をするとみんなが迷惑するところです。親と子どもと担任とのコンセンサスをできるだけきちっとしていくというのが最も望ましいことなのですが，これがなかなかむずかしいのです。絶望して教員をやめる人の話や，自殺した教員の話を新聞やテレビで見ます。本当に残念だと思います。

加藤：むかしは国家の価値観と地域の価値観と学校の価値観がほとんど同じでしたが，いまはそうではありません。価値の多様化がはっきりしてきました。パンチパーマをかけてきた生徒がいました。担任が手におえなくなり，校長が親に電話することになりました。電話をしたら一発で終わりました。親は“先生，お古いわね”というのです。私は“私が古いかどうか学校に来て見てください。パンチパーマの子がなん人いるか”と応じておきました。優しいお母さんで，しかも問題にきちっと対応できるお母さんでなければ困ります。

あるとき母親から担任に電話がありました。担任がいないので校長の私が出ました。母親は“校長先生では恥かしいのですが，実はうちの子どものお弁当，きょうウナギなのです。ところがウメボシも入れてしまったのです。すみませんが，ウナギだけ食べてウメボシは残してほしいと，うちの子どもに伝えてくれませんか”というのです。これにはびっくりしました。

森：制服のことでちょっと思い出したのですが，話題になっていない面があります。制服は家庭にとっては大きなメリットになります。裕福でないときはなおさらです。制服がなかったら劣等感を持つ子も出てくると思います。その制服がさきほども話に出ましたが魅力的なものならなおいいと思います。私が中学生だったとき，その中学校は県で一番古い学校でしたが，七つボタンなのです。これはむかしの海軍兵学校をまねたものではないと思いますがかっこよかったです。形だけにあこがれるわけではありませんが，そういう服を身につけると，やはりその学校の生徒らしく振る舞わなければという気持になってきます。少年時代は外面的なものに対するあこがれとともに，なにか統制を求めるという気持もあるのではないかと思います。校則，校則という悪い面だけではなしに，少年の心理というものを考慮しなくてはと思うのです。

大村：もと成城大学の教授であった教育学の村井実さんが「教育とは善い人間を作ることだが，善い人間というものはなにかということがはっきりしていない。人それぞれいろいろな善い人間をあたまに描いている。善い人間とはなにかということはつかめきれないのだが，教育はそれがはっきりつかめるまで休んでいることはできない。善いということがわからないまま，毎日，その善い人間を求めて教育的なはたらきかけが行なわれている。」というような意味のことをおっしゃったことをいま思い出しました。きよう校則を取り上げてシンポジウムを行なったわけですが，校則というものも善い人間を作る手段です。いろいろな学校でさまざまな工夫が行なわれています。

４人のシンポジストとフロアのみなさま方から貴重なご意見をいただきました。校則をいろいろな角度から取り上げ有意義な時間を過しました。このシンポジウムで最後に校則はこうあるべきだ‥というような結論を得ようなどとは最初から思っておりません。それぞれの人が，心の中に新しい校則像や校則観を構築されれば，あるいは新しい知見を会得されれば，それでよろしいのではないかと思っております。

本日はどうもありがとうございました。